

## 山頭火と佐伯

山城紀久夫

(會員 佐伯市百谷)

「山頭火と佐伯」を語るには、先ず「山頭火」とはいつたいどんな人か？、そして佐伯の「工藤好美」との交遊を述べなければならぬ。山頭火を佐伯へ向かわしめた人。その人こそ「工藤好美」なのである。

### 一、種田山頭火

種田山頭火は、本名を正一といい、明治十五年十二月三日、現在の山口県防府市八王子二丁目に生まれた。

種田家は「大種田」といわれるほどの大地主で、その上、父、竹治郎は村会議員や村役場の助役などを務めていたため、経済的には何不自由のない幼年期を過ごしている。ところが、十一歳の時に母フサが自宅の井戸に投身自殺をはかり、その引き上げられた水死体を目撃するとい

う衝撃的な体験をする。

その後は、防府の周陽学舎、山口尋常中学校を卒業すると上京。東京専門学校高等予備科から早稲田大学文学部文学科に入学する。

ところが、一年生の時に強度の精神衰弱となり退学し帰郷。このころから種田家は傾き始めていた。生家は破綻し、現在の防府市大道で父親がはじめた酒造業と一緒に営む。

明治四十二年、二十七歳で佐藤サキノと結婚。翌年には長男・健が誕生した。文芸活動を開始し三十一歳の時、萩原井泉水に師事して「層雲」三月号に初出句。

俳号に山頭火を使い始める。

この頃が山頭火の人生でもっとも幸せな時期でもあった。なぜなら、この後傾きかけていた種田家が大正五年には破産してしまうからだ。父は行方不明となり、三十四歳の山頭火は熊本に友人、兼崎地橙村を頼って妻子とともに移り住む。家を失い、生まれ故郷をあとにした山頭火だったが、山口との縁は切れなかった。

ところで、山頭火が「第二の故郷」といった熊本に移り住んだのは大正五年、三十四歳の時のことである。

妻子と共に友人を頼つての移住。間もなく熊本市下通り町一丁目に古書店（後に額縁店）を開業し、屋号を「雅楽多」と名づける。

三年後、三十七歳にして文学立身の夢を捨てきれず単身上京。大正十二年関東大震災に遭い、東京での生活をあきらめ熊本へ帰る。この間、俳句の方は大正十年から十三年まで「句作を休止する」ということで作っていないかった。この上京中に妻「サキノ」とは離婚する。

すでに離婚していた妻の住む熊本に帰つたものの、泥酔のはて、路面電車を止めるといふ事件を起こしている。大正十四年二月、報恩寺（曹洞宗）で出家得度。耕畝と改名して植木町の味取観音堂守となる。ここで過ごしたのは一年余り。大正十五年四月、山林独住に耐えかねて観音堂を去り、一鉢一笠放浪の旅へ出る。

その後、昭和五年十一月から翌年の六月まで、市内春竹琴平町に二階一室を借り「三八九居」と名づけて自炊生活をした。酒で失敗し行乞ぎょうこ以外にはなれないと放浪する。この行動は熊本時代から本格化していく。

漂泊行乞の末、昭和七年五十歳で山口市小郡町に結庵「其中庵」と名付ける。

山頭火はこれ以前にも、山口県豊浦町川棚温泉で草庵を結ぼうとしたのだが果たせずにいた。

ここでの山頭火は、自殺未遂等があったものの故郷に近かつたせいも、旅人気分ではなく落ち着いた日々を過ごしている。其中庵を基点としての旅は、東日本の良寛・西行・一茶・芭蕉ゆかりの地を四ヶ月かけて廻っている。

昭和十三年十一月二十八日、崩れた其中庵を出て山口市の湯田温泉に仮寓。四畳半一部屋の家屋を借りて移り住み、「風来居」と名づける。ここには翌年九月、松山に旅立つまで住んでいた。短い間だったが、近所に詩人中原中也なかはら ちゅうよの実家があり、中也の弟吾郎と親しくなつて、同家をよく訪れていた。

山頭火が終焉の地と定めたのは愛媛県松山市。

昭和十四年十二月二十五日、松山城の北御幸寺境内に納屋を改造して庵を結び、「一草庵」と命名する。四畳半一室の間取りで、大好きな温泉（道後温泉）は数町の距離だった。

昭和十五年正月、年頭にあつた山頭火の念願はふたつ。一つは、本当の自分の句を作り上げること。

一つは、「コロリ往生」だった。

十月十日の夜、一草庵では定例の句会が開かれていた。庵主の山頭火は泥酔して寝ていたので、参加者だけで句会が行われ散会した。

その翌朝、山頭火は二度と目を覚ますことはなかった。脳溢血が原因である。最後は自らが望んだとおり「コロリ往生」を遂げる。享年五十七歳。

## 二、一鉢一笠、行乞の旅に出る

大正十五年四月、「解くすべきもない惑ひを背負うて、行乞流転の旅に出た」（行乞記一）。

大正十五年四月七日、山頭火が句作の上でもっとも影響を受けた尾崎放哉が小豆島の南郷庵で亡くなった。

その三日後の四月十日、山頭火は熊本植木町の味取観音堂を出て一鉢一笠の行乞の一步を踏み出している。

熊本を出て九州を周り、昭和四年三月熊本に帰るまでの間に広島から山陰地方、さらに四国八十八ヶ所巡り、小豆島で尾崎放哉の墓参りをすませ、北九州を経ての長い行乞だった。この四十四歳から亡くなるまでの十三年間は、ただひたすら俳句と酒を友に歩き続けたのである。

（歩々到着・一所不住・人生即遍路）

終生芭蕉を思慕してやまなかった山頭火。その山頭火の信条は「身を以て句作すること」であり、それを実現するための旅だった。旅即俳句なのである。

第二回の行乞記は、「私はまた旅に出た。愚かな旅人として放浪するより外に私の生き方はないのだ。」という書き出しで始まっている。

昭和五年九月、宮崎方面から福岡を経て十二月に熊本にもどっている。

この外にも北は岩手県の平泉から南は鹿児島県の志布志まで、体力の限り行乞流転の旅は続いた。その間に詠んだ句は七万句とも言われ、全国各地に句碑が建てられている。

## 三、山頭火と工藤好美・千代

さて、山頭火の人となりはこの程度にして、ここで「工藤好美」について記したい。

工藤好美は、大分県佐伯生まれ。大正十三年、早稲田大学英文科卒。千葉県立佐倉中学校などで教えたのち、昭和

三年、台北帝国大学助教授、昭和五年オックスフォード大学に留学、教授となる。

敗戦後、本土へ帰国し名古屋大学文学部教授、神戸大学文学部教授・奈良女子大学教授を併任、京都大学文学部教授、青山学院大学教授、東北学院大学教授、東海大学教授を経て、昭和四十九年退職。

大正五年佐伯中学を卒業。その後熊本五高に入学。高木市之助教授ら五高中心の歌詩「極光」の編集に携わり、徐々に短歌で頭角を現してきた。

この頃、種田山頭火を知る。

「ある日、下通りを歩いていると、見慣れない古本屋があるのに気づき立ち寄ってみた。この店は簡素だが上品でいわゆる垢抜けしていた。」というのが、その時の印象である。片隅に古本が置いてあり、それは少量であるが熊本では手に入らないような本もあった。そんなことで、ぼつねんと番台に座っている近眼鏡の店主に何か好奇心を持ったという。

二、三度立ち寄るうちにその店主と言葉もかわすようになり、山頭火との親交が始まっている。

佐伯の山頭火を裏付ける資料として、次の資料がある。

「行乞記・書簡・佐伯新聞」

山頭火は、昭和五年九月九日雅楽多がらくたをあとに南へと行乞流転の旅へと向かう。

旅立ちに当たって、それまでの日記や手記はすべて焼き捨てて再出発に賭けた。焼き捨てたノートは八冊。

新たな記述は昭和五年九月九日から書き継がれ、その克明な生涯の記録は、福岡県田川郡糸田村に住む木村緑平に送られ「行乞記」として世に出ることとなる。

焼き捨てて 日記の灰のこれだけか

従って、佐伯と関係する資料はこの時点で焼却されたものと推定される。

では、山頭火は「いつ、どんな目的で」佐伯を訪れたのだろうか。

山頭火が一回目に佐伯を訪れたのは、「工藤好美」の妹「千代」が亡くなったことを知り、大正十四年八月六日故郷防府から駆けつけた時である。

誰からそのことを知りえたのか定かではないが、来たことは確かである。

工藤兄妹は、大正八年山頭火が上京して以来の親交があり、山頭火の東京での良き支援者でもあった。

大正八年十月、上京した山頭火の仕事さがしに、早稲田大学生工藤は奔走する事となる。

大正九年十一月、工藤兄妹の紹介で東京市役所臨時職員として「一ツ橋図書館」に勤務することとなった。

大正十二年九月末東京を去り、熊本へ帰る四年間の東京での生活は、工藤兄妹との深い親交によるものであったに違いない。なお大正九年十一月には、妻サキノと離婚している。

熊本に帰つてからの山頭火は酒におぼれ、電車を急停止させると言つた事件も起こしている。そんななか、山頭火は禅門に入り、出家得度し味取観音堂の堂守として近在を托鉢しながらの句作活動をしている。

さて、山頭火が佐伯を訪れる前後の足取りを書簡や佐伯新聞により確かめると、

大正十四年四月二十六日より「工藤好美」による「妹への手紙」が佐伯新聞に投稿連載されており（十三回）、七月十二日号に次のように記されている。

千代さん。私はこう書いて暫く呆然としています。そして、力なく机の上に筆を置くとき、不覚の涙が頬に流れます。この前の手紙を書くときには、あなたは側らに寝てゐました。

そして私が中に引用した芭蕉出郷の句を忘れて思ひ出さなかつた時、あなたはそれを教えて下さいました。

けれどもこの手紙が新聞に出たときには、あなたはそれを読んで下さいませんでした。

あなたは既にその前日、あなたが長い間、或るときは近く或るときは遠く、あなたの前途に望んでみた別の世界に旅だったのでした。……（後略）

この妹への手紙は、七月五日投稿の日付があり、千代の命日は七月四日と言うこととなる。

従来は、十月四日と言われていたが、この手紙から千代の命日がはっきりされたこととなる。

また、書簡には次のような内容が記されている。

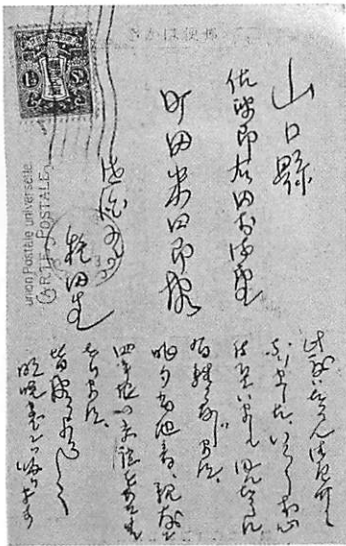
大正十四年八月五日

ほうふ  
防府にて

木村縁平へ

先日はおじゃまいたしました、急にまた帰郷することになりました、三年振りに父母の墓前に額づきました、今夜白船君を尋ねるつもりです、奥様によろしく。

さらに、八月七日付けで山頭火は、暁嵐の滝の絵はがきで、妹婿、町田米四郎に宛てて佐伯に到着した旨をしたためている。



山口縣

佐波郡右田村佐野

町田米四郎様

佐伯にて

種田生

消印

大正十四年八月七日

佐伯



此度はたいへん御厄介になりました。いろいろなお心付下さいます、ほんたうに有難う存じます。

昨夕當地着、親友と四年振りの交誼をあたためてをります。皆様によろしく  
明晩までには帰ります

### 裏面

佐伯地方は予期したよりいいところでありました

八月七日

佐伯新聞の「妹への手紙」、書簡、葉書から推察すると千代が死亡したことを知ったのは、八月五日夜徳山に久保白船を訪ねた時ではないか。

そして、防府に先祖の供養に帰ったにもかかわらず、急遽佐伯を訪れたのであろう。

東京で恩義を受けた千代に対しての墓参であったのではないか。

このあと、また故郷防府へ引き返し、熊本味取観音堂へ帰ったことは、左の書簡ではつきりする。

大正十四年八月十六日

味取観音より

木村緑平へ

今朝帰山しました、いつ御来山下さいましてもよろしくございますが、十八日は観世音祭日、廿日は定期托鉢日でありますからそれ以外の日の方がゆつくりあそべます。

三日位前におハガキを下さい、

奥様によろしく。

久しぶりに掃く垣根の花が咲いている

秋風の木の皮がはげる山寺

菩提樹によりかかりまた月と逢うている

枕もちて月のよい寺に泊まりに来る

真夜中にはだして猫がもどって来た

山寺の猫夜中虫とって来てあそぶ

朝の鐘撞くそばから見ている

山頭火が二回目に佐伯を訪れたのは、昭和四年十二月二十三日のことである。

大正十五年四月十四日

報恩寺より

木村緑平へ

あわただしい春、それよりもあわただしく私は味

取をひきあげました、本山で本式の修行をするつもりであります。

出発はいづれ五月の末頃になりませう、

それまでは熊本近在に居ります、本日から天草を行乞します、そして此の末に帰熊、本寺の手伝いをします。

味取観音堂をあとに、熊本報恩寺に帰山した山頭火。何があつたのか。さらに、本山への修行をあきらめ大正十五年四月、解くすべもない惑いを背負うて、行乞流転の旅に出た。

#### 四、再び行乞の旅に

分け入っても分け入っても青い山

山林独居の生活に耐えかねて観音堂を去り、一鉢一笠行乞放浪の旅立ち。九州各地を行乞。

そして、昭和四年十一月大分地方を行乞している。

その足跡は…。

十一月

十五日

英彦山～耶馬溪

十六日

耶馬溪～羅漢寺

十七日

羅漢寺～中津

二十日

中津～豊前四日市

二十六日

宇佐神宮～豊後赤根

十二月

三日

赤根温泉～別府

六日

別府

九日

大分

十四日

大分(九六位山)

十六日

臼杵

二十三日

佐伯

二十七日

竹田

二十九日

竹田

十一月十五日から十二月二十九日までの行乞は、むしろ、九州西国三十三観音を巡る旅であり、母の回向を兼ねた札所の巡礼でもあつた。

巡礼は、決まつた霊地を経巡るのである。個人的な計らいがあつてはならない。経路をはずれるのは良くない。

しかし、二十三日佐伯に足を向けている。



疑問がわく足取りである。

二十三日師の井泉水に宛てた葉書には、次のような内容がしたためられている。

昭和四年十二月二十三日

旅より

萩原井泉水へ

白杵から佐伯へまいりました、今日は山間を八里歩いてここまで来ました、小さい宿場で何だかロマンス中の人物になったやうな気がします、黙々として山また山を越える、孤独の寂しさと安けさを感じずぎるほど感じます、かうして歩きつづけてどうなるのか、どうしようといふのか、どうすればよいのか、ただ歩くのであります、歩く外はないのであります、歩くことそれだけで沢山でありませうか。

解くすべもない惑いを抱いての九州・四国・中国・近畿・東海・東北と行乞流転の旅を重ねているが、佐伯を訪れた目的それは、長い間の工藤好美・千代兄妹への恩義に報いる旅であつたのであろう。

おそらく焼き捨てた日記の中に佐伯を綴った内容や句

があつたに違いないと推測する。

山頭火が佐伯を訪れた記録は、この二通の書簡により確かであり、そのことは五高以来親交の深かつた「工藤好美」との縁によるものである。

五、終わりに

最後に「山頭火の恋」について興味ある日記を紹介しなす。

其中日記三

十二月十六日

からりと晴れて、とてもよい天気である、私は恋というものを知らない男である。かつて女を愛したこともなければ、女から愛されたこともない（少しも恋に似たものを感じなかつたとはいひきれないが）、私は何よりも酒が好きだ、恋の味は酒の味のやうなものではあるまいかと、時々考へては微笑を洩らす私である、酒は液体だが女は生き物だ、私には女より酒がむいてゐるのだらう！

女の肉体はよいと思ふことはあるが、女そのものどうしても好きになれない。女がゐなくても酒があれば、米があれば、炭があれば石油があれば、本があれば

ば、ペンがあれば、それで十分だ！

また、工藤好美著「文学のよろこび」のなかに、次のような一文もありました。

このことから山頭火が大正十四年に佐伯を訪れたことがわかります。

## 二 俳句

### 山頭火の場合

私の妹が大正十四年の秋、九州東海岸の小さな城下町で亡くなったとき、生前から知りあいであった種田さんが弔問にきて、非常に照れながら、お経をあげてくれた。そのあとで僅かなお布施を出すと、またいつそう照れながら、それでも、どうにか受けとってくれた。その晩、二人で布団をならべて寝ながら、ひさしぷりにいろいろの話をした。……後略

うしろすがたのしぐれてゆくか



平成二十三年六月二十五日

渡町台公民館にて